

# 信頼社会— 寛容性とソーシャル・キャピタル

片岡 えみ（栄美） 駒澤大学文学部教授



## 1. 信頼の重要性とは

面識のない他者を信じることができるか、それとも気を付けるに越したことがないか、それとも考えるかという問題は、一般的信頼の問題として世界的に注目を集めるテーマとなってきた。現代において他者への信頼が注目される理由は、それが人々の協調行動を円滑に促し、社会や集団の安定や統合、目標達成に貢献するということが明らかになってきたからである。

もし多くの人が互いの価値や習慣の違いを認めつつ、互いに信頼感を持つことができるとしたら、これは「信頼社会」とよぶことができるだろう。人種や宗教、価値観、習慣の違い、いいかえれば社会的境界線を越えて互いに信頼できるということは、ある意味、理想的な社会の構想でもある。私が研究を通じて探究してきたことは、そうした信頼社会を実現するには、社会の中で人々がどのような価値観を醸成することが必

要か、そしてどう行動するかということでもある。また逆にどのような人が他者への寛容性が低くなり、排他性を示したり、閉鎖的な関係性を作り上げているかということも明らかになることであつた。

そのひとつとして、子どもをもつ親への調査<sup>1)</sup>から、親たちの地域でのソーシャル・キャピタルと信頼の問題、そして「異質な他者への寛容性」の問題について、調査結果をもとに考えてみたい。子育て中の親たちは、学校や地域の活動に関わる機会も多く、ある意味では地域の中でソーシャル・キャピタルを形成しやすい。地域での円滑な人間関係の醸成や地域への信頼の醸成は、一般的な他者への信頼とどういう関係性をもつのだろうか。つまり一般的他者を信頼できる人とそうでない人というのは、何が違うのであろうか。また親たちは、異質な価値観や行動様式を示す他の人たちにどう対処しており、それは他者への信頼関係とどういう関係にあるのだろうか。地域ソーシャル・キャピタルと寛容性と一般的他者

への信頼という3つの概念の関係について検討しよう。

ちなみにソーシャル・キャピタルとは、社会関係資本と訳され広まってきた概念である。概念定義は一つではなく、研究者によっても異なるが、ここではアメリカの政治学者の帕特ナムの定義を紹介しておく。

ソーシャル・キャピタルとは「協調行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」である（Putnum 1993）。

この中で他者への信頼はソーシャル・キャピタルの重要な一部となっている。現在では世界銀行はこの考えに基づき、発展途上国の開発援助の方法として、ソーシャル・キャピタルを醸成する方策をとり入れるなど、実践的にも多方面に影響を与えている。



## 2. 誰が他者を信頼できるのか

現代日本の都市部において、近隣住民との付き合いはなかなかむずかしいあるいは希薄化していると感じられる。ましてやいったいどれだけの人が見ず

知らずの他者、すなわち「一般的他者」を信頼できるのだろうか。

調査では一般的信頼について「いやな人間や、許しがたい人間も少なくないが、基本的に、世の中、善良で信頼できる人間のほうが多いと思っている」という問に対し4択で回答してもらった。結果は性別による有意差はなかったが、学歴による差は有意で（図1）、高学歴者ほど一般的他者への信頼は高くなる。中学卒の親では他者を信頼しているものは、「少しあてはまる」の回答も含めて39.7%だが、四大卒で71.2%、大学院卒では76.6%と大きな差が見られた。教育と信頼の関係性は、日本だけでなく多くの国で同様である。

これ以外の社会的属性では、一般的信頼

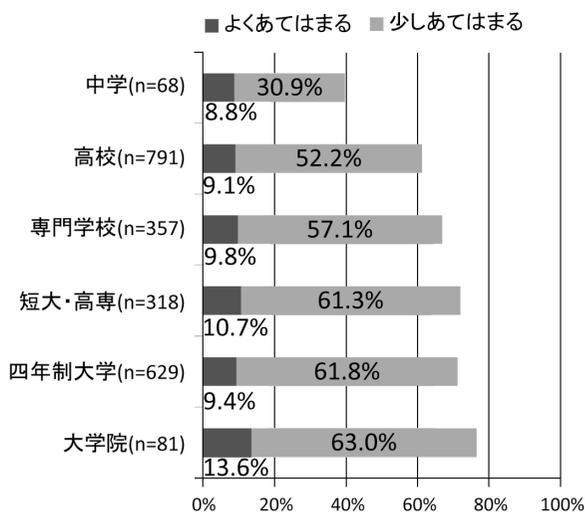


図1 一般的他者信頼の学歴別結果  
(基本的に世の中、善良で信頼できる人間のほうが多いと思う)

は年齢や世帯収入とも関連をもっており、年齢が高いほど他者信頼は高く、年収の低い世帯での一般的信頼は低かった。



### 3. 地域ソーシャル・キャピタルは一般的他者信頼を高めるのか

信頼感といっても、さまざまな水準で測定することが可能である。今回のデータでは、親たちが暮らしている地域の「近所の人たちへの信頼感」と「地域行政への信頼」を測定し、これをまとめて「地域信頼（地域への信頼感）」として概念化した。

さらに実際の地域での近所づきあい（近隣ネットワーク）の頻度がどの程度活発であるかということが、上記の地域信頼、とくに「近所の人たちへの信頼感」に影響があることは十分予想できることである。実際にデータ分析結果はそれを支持していた。

では、見知らぬ一般的他者を信頼できるという一般的信頼は、この地域信頼や近隣ネットワークの多寡とどう関連するのだろうか。いいかえれば地域でのソーシャル・キャピタルの醸成をすることで、一般的他者への信頼は高まるのだろうか。

クロス集計や重回帰分析の分析法では、近隣ネットワーク、つまり近所づきあいがよいと、一般的他者信頼は高まるという関

係性が確認されている。筆者の分析でもそれは同様で、具体的なソーシャル・キャピタルの一つである近所づきあいは、重回帰分析では一般的他者への信頼感を高めるという結果であった（片岡 2014a）。もちろん、近隣ネットワーク値が高いと、地域信頼も高くなる関係にある。これらは地域の中で完結する信頼とネットワークからなる地域ソーシャル・キャピタルが存在しているということである。

しかし地域でのソーシャル・キャピタルの醸成が本当に、一般的他者への信頼を高めるのだろうか。なにか別の要因が、この関係性を生み出している可能性も考えられる。なぜなら重回帰分析では概念間の相互の因果関係を十分には説明できないからである。そこで筆者は共分散構造分析という手法により、同じデータを用いて、考えられるあらゆる因果関係（双方向パス）のすべてを含むモデルを検討し、その中から、もっとも現実にフィットする説明モデルを析出した（片岡 2014b）。その結果の一部が、図2であり、全データを分析した結果である。図2の矢印（パス）と数値が示されているのは、そこが統計的に有意だったということで、表示されていないパス（とくに双方向の逆向きパス）は有意ではなく、効果がなかった。

図2からは、近隣での水平的ネットワークを多くもつ人ほど、地域への信頼感は高くなっていった。すなわち近所の人と立ち話をしたり、相談をしたりという4種類の近所付き合いにおいて活発な人ほど、近所の人への信頼感も高く、また地域行政への信頼も高いという結果であり、地域への信頼感が高い。そしてこの「近隣ネットワーク」という合成変数や「地域信頼」に影響を与えているのは、異質な他者を排除しないという意味での「寛容性」の価値態度であった。また一般的他者信頼に最も強い影響を与えていたのも、この「寛容性」という変数である。以下、これについて詳しく説明しよう。

#### 4. 異質な他者への寛容性と一般的他者への信頼

図2に示すように、筆者の分析からは、近隣ネットワークが良好であっても、一般的他者への信頼感には何の影響も持っていないということが明らかになってきた。近所づきあいに象徴されるようなネットワークは、一般的に他人を信頼できるかという抽象的な質問とは別次元の問題であるということである。

ただ、地域信頼が全般的に高い人ほど、他者信頼はやや高くなる傾向（0.20の効果）が見られたので、まったく近所づきあいと

一般的他者信頼が無関係というわけではないが、その関係性は弱い。ここには示していないが、男女別に分析した結果、女性では地域信頼から一般的他者信頼へのパスがプラス（0.20）で有意であったが、男性データでは全く効果をもたなかった。つまり男性（父親）は地域での近所づきあいや地域信頼が高

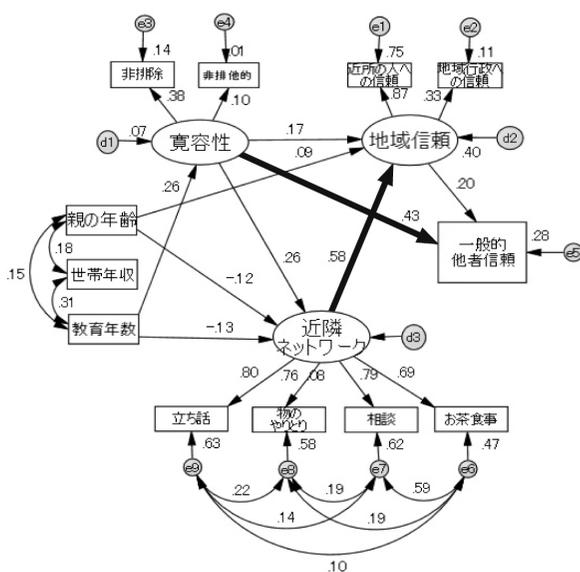


図2 全データ： 地域信頼、一般的他者信頼、近隣ネットワークと寛容性  
GFI=.988 AGFI=.976 AIC=235.823 n=2129

くとも（つまり地域ソーシャル・キャピタルが充実）、それは一般的他者信頼には至らないのである。ある意味、それは職住分離という現代の働き方からくるものかもしれないが、それにしても男性の地域ソーシャル・キャピタルは一般的他者信頼とは無関係なのである。

では、なにが一般的な他者への信頼をもたらしているのかというと、図2からも明らかかなように、それは寛容性という価値態度である。

ここで寛容性といっているのは、厳密には異質な他者への排他性を示すかどうかという意味である。質問文は「自分の考え方や好み、やり方が違うからと言って、その人を遠ざけることはしない」という「異質な他者への非排他性」と「考え方や価値観の合わない親とは付き合わないようになっている（逆転値を使用）」で「異質な他者への非排除」を示す項目で、いずれも4件法で回答を求め、これら2項目から「寛容性」尺度が構成されている。

結果からは、排他的ではない寛容性の高い人が一般的他者を信頼する傾向が高いということが示されていたのである。同時に寛容性の高い人ほど、近隣ネットワークも良好で、かつ地域への信頼感も高いという関係性があった。つまり図2の中で、寛容性

の概念はもっとも影響力の強い変数であり、地域のソーシャル・キャピタルや地域信頼を生みだしているだけではなく、一般的な他者信頼に非常に強い影響を与えていることが明らかとなった。

ちなみに逆の矢印として「一般的他者信頼」→「寛容性」という効果があるのかも検討した結果、この矢印は効果をもたず、図2のモデルが最も妥当である。すなわち一般的他者を信頼しているから寛容性が高くなるのだという説明は成立しなかったということでもある。あくまで異質な他者に排他的にならないという寛容性の価値態度を示す人が、他者を信頼し、地域でソーシャル・キャピタルを醸成する人達なのである。

ではこの結果は、何を意味しているのだろうか。



## 5. 寛容であることと社会的閉鎖

考え方や価値観が大きく異なる他者に対し、われわれはどれだけ寛容になれるのかという問題は、さまざまな個人的・集団的利害の衝突する社会においては、むずかしい課題の一つであろう。

実際にこの調査でも、「自分の考え方や好

み、やり方が違うからと言って、その人を遠ざけることはしない」（非排他性）に「よくあてはまる」と回答したのは12.1%、「少しあてはまる」39.6%、「あまりあてはまらない」40.6%、「まったくあてはまらない」7.2%であった。また「考え方や価値観の合わない親とは付き合わないようになっている」では「よくあてはまる」が8.8%、「少しあてはまる」33.6%、「あまりあてはまらない」46.9%、「まったくあてはまらない」10.6%という結果であった。非排他的な親が約50%、排他的な親が約40%ということになる。

図2の結果から、寛容性が高い人というのは、教育年数の高い人たちであるということがわかる。高学歴層のほうが異質な他者に対して寛容であるということで、教育の効果が高いことがわかる。教育に期待するしかないという期待をもつその一方で、次に示すように高学歴層ほど閉鎖的で排他的になる場合があって、矛盾した結果が同じデータからわかってきたので、おそらく高学歴層が分化していると考えたほうがよいだろう。

教育問題とからめていうならば、実はこの排他的、排他的な親たちは、子どもたちに中学受験をさせたいと願っている親により特徴的に現れる価値態度であることが同じデータから明らかになった。子どもを私

立や国立の中学に行かせたいと思っている親ほど、この異質な他者への寛容性が低く、子どもを地域の公立中学から離脱させることに熱心になっているのだ（片岡 2009）。彼らは何を求めているかという、教育熱心な親同士の同質的なネットワークに価値を置いているのである。その結果、何が起きるかという、お受験組の世帯が地域活動や地域から離れていくということである。彼らは子どもによかれと思って私立中学へ送り出すことで、自らも同質的なネットワークを好んで選んでいる。それは親が学校選択を通じた閉鎖的な社会関係資本を選び取っていくという形で、地域のソーシャル・キャピタルから離脱する道にもつながっているのである。子どもの学校選択を通じて親も地域を離れて、より同質的な選択的ネットワークを築くという、このきわめて都会的な現象が、今後の日本のエリート的人格形成にどのような結果をもたらすか、また地域社会との関係でどういった問題が起きてくるかについては、目が離せない問題でもある。

注

1) 調査の母集団は関東圏1都7県（山梨含む）の3歳～中学3年生の子どもを持つ親（父母）を対象に3000世帯を層化2段確率比例抽出法で抽出し、郵送法で6000名の親に質問紙調査を実施した（2006年11月～12月実施）。有効票は2283票で世

帯単位の回収率は44.03%であった。

文献

片岡栄美, 2009, 「格差社会と小・中学受験 ―受験を通じた社会的閉鎖、リスク回避、異質な他者への寛容性―」『家族社会学研究』21巻1号、日本家族社会学会、30～44頁。  
片岡えみ, 2014a, 「信頼感とソーシャル・キャピタル、

寛容性」『駒澤大学文学部研究紀要』72号137～158頁。

片岡えみ, 2014b, 「信頼感とソーシャル・キャピタル、寛容性」日本社会学会第87回大会一般報告配布資料。  
Putnum, Robert D., 1993, 『哲学する民主主義 ―伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳, NTT出版。

プロフィール……………  
かたおか・えみ 駒澤大学文学部社会学科教授。大阪大学大学院博士課程 人間科学研究科単位取得中途退学。博士（社会学）。専門は社会学、文化社会学、教育社会学、社会階層論。関東学院大学文学部現代社会学科 教授、ハーバード大学社会学科 客員研究員などを経て、2006年4月より現職。主な著書に『文化の権力 反射するブルデュー』宮島喬・石井洋二郎編（共著）藤原書店2003年、「小・中学受験の社会学―受験を通じた階層閉鎖とリスク回避」北澤毅編『＜教育＞を社会学する』（共著）学文社2011年、他著書・論文多数。